

妄想と文学へ「海」に寄せて

横尾 和博

文学は妄想である。

実業の世界とは異なり夢や自意識を育むものである。

科学や技術がいまよりさらに発達して、妄想がコンピューターや医学や心理学で解決されるようになったら文学は終わりである。

吉本隆明は「ぼくが真実を口にするとほとんど全世界を凍らせるだらうといふ妄想によつてぼくは廃人であるさうだ世界は」とうたった（「廃人の歌」）。

私はそのような孤高の詩人の言葉を紡ぐことはできないが、たとえひとりになつても全世界と対峙する力をもちたいと考える。

また埴谷雄高は、想像という言葉を避けて「妄想」におきかえ、現代は存在と意識の相剋の時代と位置づけた。

さて今年はドストエフスキー『地下室の手記』が世に出てから百五十年がたつ。同書の語り手の男は四十代の退職官吏で、精神の地下室に閉じこもっている。現代の引きこもりだ。男の引きこもりの理由は、極端な自意識過剰で社会とうまく適応できないからである。冒頭は「わたしは病的な人間……わたしは意地悪な人間だ。私は人好きのしない人間だ」と始まる。まさに妄想の世界だ。男は西欧的な合理主義、功利主義に盛んに毒づき、「 2×2 が4」という計算に毒づく。「 2×2 が5だつてよい」「 2×2 が4は、実にガ

マンのできないしろ物」などと数理公式まで批判する。

極度の自意識過剰、自己戯画化の持ち主であるが、実はこの心性は私たちの心のなかにも深く存在するのではないか。

話題一転。私の母方の祖母は佐賀出身である。佐賀や九州にシンパシーを感じる。だから応援歌を書く。私は縁があり全国の同人誌を読むことになってから十年くらいだ。多くの作品にふれているが、九州の書き手は達者である。すぐれた作品の量の比較では西高東低だ。もちろんすぐれた書き手は九州以外にもいる。私の知る限りでも名前をすぐに挙げられる書き手は四国の誰、北海道の誰というように。しかし九州の書き手には特徴があるようだ。それは、情念の濃さのようなものがないように感じる。土地柄なのか。さて本誌主宰の有森信二は地道に「海」を発行している。また上京し、全国の仲間と触れ合っている。実にまじめで愚直な書き手だ。その「海」が名のおり、茫洋としながらときには荒い貌を見せて、全国の同人誌界に発信してもらいたい。そして書く行為をなによりも大切にし、宮澤賢治「雨ニモマケズ」ではないが、功名をのぞまず、でくのぼうと呼ばれても、ただ黙々と書く人たちの場になつてくれれば、私のような愚かな批評家にとつては燈台となる。「海」の健闘を祈りたい。

妄想が服をきて大通りをさつそうと歩くような、そんな同人誌を望む。

筆者プロフィール…

文芸評論家、放送作家、NHK学園自分史講座講師。現在東京新聞、北海道新聞、時事通信で書評を担当。著書『新宿小説論』『立松和平 文学の修羅として』ほか。テレビでは愛川欽也、武田鉄矢などのレギュラー番組の企画・構成、台本制作を担当。またテレビ、ラジオのコメントーターとしても活動中。